

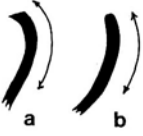
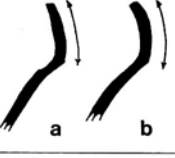
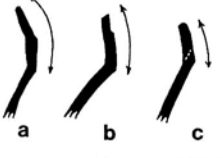
第2節 佃遺跡出土縄文土器の編年 －特に元住吉山式土器について－

岡田 憲一・深井明比古

佃遺跡出土の縄文土器は整理箱にして約800箱。報告中にあるように、早期末前期初頭に位置づけられるものから晩期末の凸帯文土器にまで及ぶが、その主体は中期中葉、後期中葉、晩期前半にあり、中でも後期中葉の土器がその大部分を占める。その要因の一つに南区縄文下層の遺物集積の重量とも表現しうる堆積状況があるが、この層位的発掘によって該期土器群の編年研究に寄与しうるデータが得られた。そこより出土の土器は、既存型式でいうところの一乗寺K式から元住吉山Ⅰ式、同Ⅱ式にあたり、京都盆地周辺で推進された泉拓良氏の一連の研究（泉1981、1989）があるものの、爾来進展を見ておらず、晩期を睨む後期後葉土器群の理解に対しても大きな支障を来たしている。そこで本稿では、遺跡形成過程に基づいた層位データと豊富な完形復元個体を用いた型式論とによって、本遺跡における土器群の変遷を摘出し、それとその他の遺跡との対比を図って、近畿地方における当該期土器編年を整備する。また、元住吉山Ⅱ式が広域にわたる凹線文ホライズンの一環をなすことに鑑み、その形成の土壌たる広域編年を同時に構築し、その生成の過程を跡付けたい。

1. 器種分類（第2～5図）

本遺跡出土土器を分類するにあたっては、その基礎を口縁部形態のあり方に置いている（第2図）。それには大きく二形が認められ、屈曲の有無という点をもって、内屈口縁の“Ⅰ類”、広口口縁の“Ⅱ類”という二者に分別される。これらはそれぞれその特徴となる屈曲具合によってさらに細分することが可能である。内屈口縁Ⅰ類においては、〔1〕内彎、〔2〕内彎内屈、〔3〕内屈に三分、広口口縁Ⅱ類においては、やはり〔1〕内彎、〔2〕外反、〔3〕直行の三つに分類する。ただし、Ⅰ1類は屈曲ではないので厳密にはこの分類に該当しないはずであり、なお、Ⅱ1類との分離が難しい。この問題は、有文土器についてはその施文域のあり方で解消したい。つまり、概してⅠ1類は外面施文、Ⅱ1類は内面施文をとる。さらにⅠ1類はa、b種二つに細分して考えるが、その際の指標は文様が展開する口縁部の上端部無文帯が内折するか否かにおく。“内彎内屈口縁”としたⅠ2類は、外面に展開す

Ⅰ類 (内屈口縁)		Ⅱ類 (広口口縁)	
1 内彎		1 内彎	
2 内彎内屈		2 外反	
3 内屈		3 直行	

※矢印の示す範囲は有文土器における主要な施文域

第2図 口縁部形態分類模式図

る口縁部文様帯の下限に稜をもたせて傾斜を変えており、外見上内屈とみなせるものであるが、内面は一連に大きく内彎させて作るもので、頸部の外反が強いところに外向する文様帯を設けようとしたがゆえに生じた結果である。典型的なものはⅠ2類aとしたもので、その内面に注目すると、外反して立ち上がる頸部は上に続く口縁部にいたる手前に段が設けられ、そこより傾斜角を変え、口縁内面上端部まで一連に内彎して成形、調整が施される。対する口縁部外面も当然内彎気味となるが、頸部の外反強く、その交わる稜が頸状に大きく張出すことにより、内屈する様をみせる。一方、Ⅰ2類bは口縁部から頸部内面にいたる成形、調整が別途なされており、単純に内屈とすることもできる。ただし、外反する頸部より立ち上がる口縁部は幅広く、かつ内彎して作られており、次のⅠ3類との中間的様相を呈するものとして別にして考える。この口縁部形態をとるものは、頸部外反することを前提としているが、それを求めることの難しい浅鉢形土器などについては口縁部の幅広内彎の特徴をもってこれに比定しよう。Ⅰ3類は口縁部に内彎要素を持たず屈折によって成形されるもので、その半ばに段を有するか否かで“有段口縁”と“無段口縁”に二大別可能である。前者はさらに段部以上が明瞭に内折して作られるa種、段のみが表出されるb種に分かたれるのに対し、後者は単純に短く立ち上がるものでc種とする。

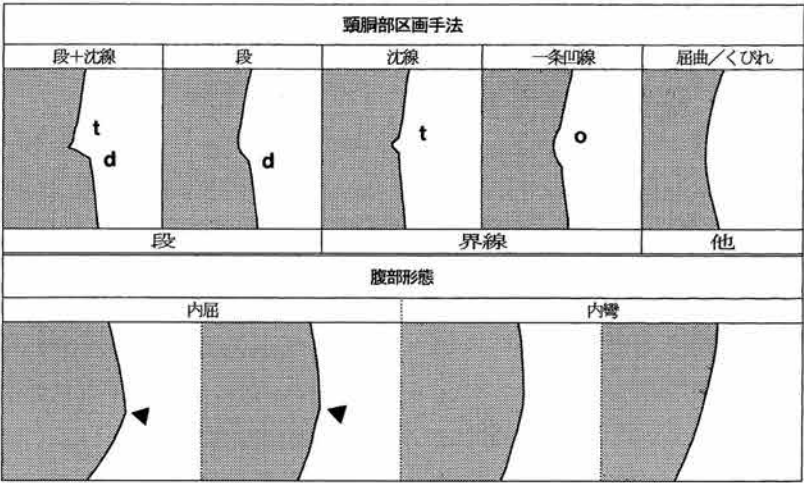
広口口縁のⅡ類は特徴少なく、かえって細部における多様性も多いが、Ⅰ類における屈曲具合に基づく分別に従う形で、その開口具合によって三分する。Ⅱ1類は口頸部が内彎気味に立ち上がるもので、先述の通り施文域は概ね口唇部から口縁部内面に限られる。広口の皿形浅鉢などには一般的な形態。一方、Ⅱ2類は口頸部外反するため、必然的にその採用される器形は限られてこよう。Ⅱ3類は口頸部が直行するもので、Ⅱ1類、Ⅱ2類の中間にあってそのどちらでもない形態である。口縁部のみ肥厚させてつくるものも知られる。後二者の施文域は口縁部内面となるのが一般的であるが、外面においても上端に限って幅狭くみられる場合がある。

以上の口縁部形態分類を踏まえ、その器本体となる器形との相関をもって設定される器種分類を示す(第4図)。器形については深鉢、鉢、浅鉢といった類型分類による概念を用いるが、これらのクライテリアについては一意に印象によるものとせず、器高が口径以上の「深鉢形」、器高が口径の2/3前後となる「鉢形」、器高が口径の1/2前後あるいはそれ以下となる「浅鉢形」を標準にとり、それに若干の幅をもたせて呼称する。また、これらは頸胴部のあり方によっても形態上大きく分かたれ、[A] 頸胴部を明瞭に分帯するもの、[B] 頸胴部を分かたず、口縁部から直に胴部にいたるため、概して砲弾形を呈するもの、の二形を指示することができる。この両者の明分は頸胴部の区画程度により決定されよう。そこに採用される手法を一瞥すると、第3図に掲げるように大きく三種認められ、段、界線などを設けるもの、その他の形態や調整のみにより不明瞭なもの等が認められる。段あるいは界線によるものが上記の形態[A]を支持するものであることは異論なからうが、界線を用いる場合は形態や調整上の区画が不明瞭なことが多く、全形はより[B] 砲弾形に近いものとなる。以下の腹部形態には内屈、内彎というⅠ類口縁部に通じる二形態あり、上記頸胴部のあり方によってさらにその張り具合に変異がみられる。当然、[B]は屈曲することなく内彎形態をとろうが、[A]は内屈、内彎の腹部二形態が認められることとなろう。

これらの諸分類を表象するところの個体に今一度還元すると、第一にⅠAからⅡBにいたる大別4つの形態枠組みが構成され、その中にそれぞれ、深鉢、鉢、浅鉢といった器形分化が見出せる。これらを本遺跡で出土の土器に照らし、実態に即した形で各器種を抽出しよう。

ⅠA類には深鉢形土器は認められるが、鉢、浅鉢形土器は見出せない。口縁部形状には波状を呈する

ものと水平のものとが一般に存在するので、“波状口縁深鉢”と“平口縁深鉢”の二者を指摘することができる。ⅠB類の代表は浅鉢形土器である。これもまた、“波状口縁浅鉢”と“平口縁浅鉢”の二者が指摘される。本類に相当する深鉢形土器もないことはないが、無文の例で、その数量も稀少である。ⅡA類には深鉢形、鉢形土器が認められ、さらに前者には波状、水平二形の口縁がある。したがって、“広口深鉢”、“広口鉢”に加えて“波状広口深鉢”が存在する。ⅡB類は最も単純な砲弾形を示し、深鉢形から浅鉢形まで認められるものの、施文されるものは“広口浅鉢”および“波状広口浅鉢”に限られるようである。無文土器に



第3図 頸肩部形態分類模式図（深鉢形土器）

“砲弾形深鉢”、“砲弾形鉢”等見受けられなくはないがその数は多くない。以上が所謂鉢形土器における器種分類となる。

口縁部形態 頸部形態	Ⅰ類（内屈口縁）			Ⅱ類（広口口縁）		
	深鉢 / 鉢 / 浅鉢			深鉢 / 鉢 / 浅鉢		
A (頸部部分帯型)						
B (砲弾形)						

第4図 器種分類模式図（1） 鉢形土器

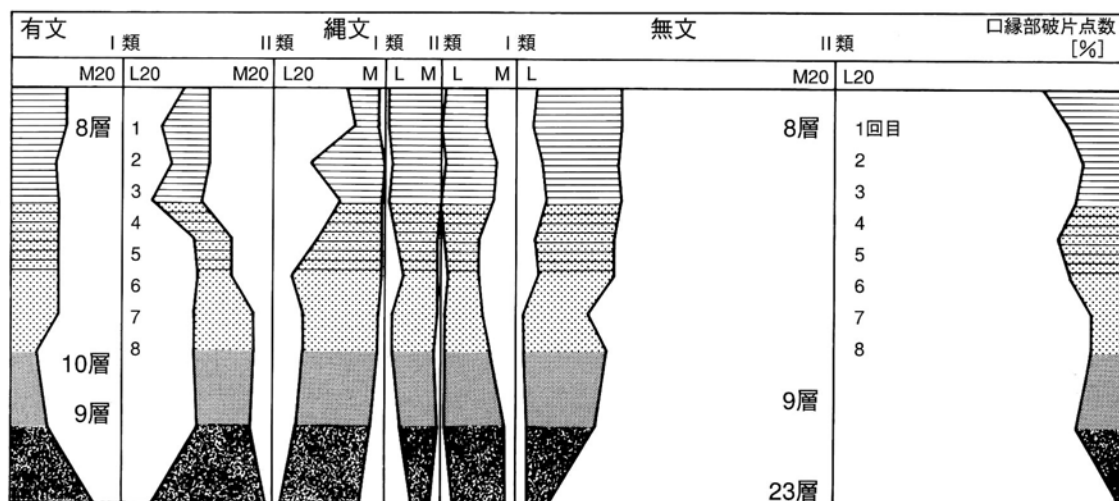
注口付土器については、大きく有頸、無頸の二形を認めるうるが、その中間形態ともいえるものにUFO形があり、その大別は合わせて三者見出せることになる（第5図）。これを体部形態分類とし、[A] 有頸型、[B] UFO形、[C]

口縁部形態 体部形態	Ⅰ類（内屈口縁）			Ⅱ類（広口口縁）	
	素縁	有段	肥厚		
A (有頸型)					有頸形
B (UFO形)					
C (無頸型)					無頸形

第5図 器種分類模式図（2） 注口付土器

第2節 個遺跡出土縄文土器の編年－特に元住吉山式土器について－

無頸型として表す。ところで、[B] UFO形注口付土器については、その無文肩部を[A]有頸型の頸部に見立てることによって[C]無頸型との仲介をなすので、その肩部以上は口縁部、それ以下は胴部との対比がそれぞれ図られよう。その観点からするとこの口縁部は、その形態分類にいうところのⅠ類に比定することが可能となる。また、以上の連鎖から考査すれば、[C]無頸型も単純に[A]の頸部以上を失ったものと解すべきではなく、[A]、[B]同様にⅠ類口縁を共有しているものと考えることができる。すなわちその屈曲部は、腹部のそれと等号で結ばれる。これらⅠ類とした口縁部に鉢形土器とまったく同様の細分を持ち込むことはできないが、類似した様相を看取することは可能である。つまり有段と無段素縁のもので、それに加えて断面三角形肥厚をみせるものが合わさり、Ⅰ類口縁部における三者の細分形態を指示するにいたる。一方のⅡ類については基本的には先の体部形態に基づく分類を踏襲し、その頸部以上をすげ替えたものであるが、無頸型たる[C]にはその存在を認められない。また、[B] UFO形においては先に解説した口縁部、肩部、胴部とも総じて一胴部とみなされ、その上に広口の口頸部がのる。したがって、このⅡ類UFO形注口付土器にいたっては若干不安定な様を



層位／地区	有文		縄文		無文		注口付土器	計
	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅰ類	Ⅱ類	Ⅰ類	Ⅱ類		
8層(1)／L20	57(16)	71(20)	3(1)	6(2)	18(5)	194(55)	3(1)	352
(2)	43(10)	89(22)	3(1)	0(0)	17(4)	257(62)	3(1)	412
(3)	42(13)	32(10)	8(2)	2(1)	22(7)	216(66)	4(1)	326
(4)	43(7)	120(18)	7(1)	3(0)	51(8)	418(64)	9(1)	651
(5)	74(19)	46(12)	11(3)	5(1)	19(5)	233(59)	8(2)	396
(6)	22(20)	5(5)	5(5)	2(2)	7(6)	69(62)	1(1)	111
(7・8)	36(19)	16(8)	3(2)	2(1)	3(2)	131(68)	2(1)	193
8層(1・2)／M20	78(15)	85(17)	8(2)	1(0)	39(8)	291(57)	5(1)	507
(3)	37(18)	36(17)	1(0)	1(0)	10(5)	120(58)	2(1)	207
(4)	57(17)	65(19)	4(1)	0(0)	19(6)	193(57)	1(0)	339
(5・6)	54(17)	34(11)	4(1)	2(1)	32(10)	185(59)	3(1)	314
(7)	29(17)	8(5)	4(2)	2(1)	15(9)	115(66)	2(1)	175
(8)	112(23)	25(5)	10(2)	9(2)	35(7)	303(61)	0(0)	494
9層	192(20)	62(6)	34(4)	14(1)	32(3)	611(64)	11(1)	956
23層	23(8)	6(2)	20(7)	8(3)	8(3)	216(76)	4(1)	285
総計								5718

※ 数値は単純破片点数、括弧内は百分率

第6図 有文・無文土器の消長

示すが、I B類のそれとは異なり、I A・II A類とともに明らかに“有頸形”の形式に連なることとなる。

2. 層位間器種別出土状況（第1表）

調査時の所見では、南区縄文下層の堆積は十六層に渡って分層されたが、それらを巨視的に把握すると、黒色地山に掘り込まれた遺構面並びにその直接的な被覆堆積である「23層」、その上位に厚く堆積する砂層、それを挟んで再び活発に形成される黒色シルト質極細砂の「8層」があり、それと下位砂層との漸移的存在として暗褐色細砂による「9層」を加えて、計四つの主要な堆積単位にまとめることが可能である。この大別層位に従って、それぞれ得られた土器を器種分類および口縁部細部形態の分類に基づき集計したものが第1表となる。ただし、調査対象は全点におよんだわけではなく、「8層」としたものは断面観察位置に接したM20区の人工層位1回目から3回目に限り、「9層」はL20区を除く全点、逆に「23層」は14・15層および23層、下位遺構出土土器を合わせたものとした。

ところで、本地区の主要堆積である8・10層の発掘方法については別章に詳述の通りであるが、ここで再び「8層」として取り扱った分析対象を上記のように限定した根拠を明示しておこう。その一は、M20区の人工層位4回目に取り上げた遺物の一部を8層より下位の10層中に包含されていたものとする認識があること。すなわち、4回目に人工層位発掘における斜面堆積物の漸移部分が存在する蓋然性が大きい。この点を各層出土遺物の組成から追求したものが第6図である。上記分類した口縁部形態に基づき、口縁部破片全点を集計のうえ百分率で示した。その内容解釈については後述するが、23層と9層の間に有文・無文土器の構成率において明らかな差異が見出されるほか、8・10層については、M20区の5・6回目を境とした上下で、有文I類とII類の比に相違が看取できる。また、隣接するL20区においても同様の操作を通じて、その5回目を境とした相違が看じ取れよう。循環論の謬りを免れないが、これらの遺物組成の表す境界が、調査時の分層認識と大きく違わないことをもって8・10層分別の根拠となし、M20区の1～3回目出土遺物を「8層」該当の分析対象とするのである。なお、下位となる10層該当の組成は、9層のそれと大きく異なるものではない。断面観察における堆積物の在り方よりすれば両者は同様の堆積過程を想定し得るので、その類似性に基づき、「9層」出土遺物をもって両者を代表させることとする。

M20区においては4回目、L20区では5回目より上位から、元住吉山I式沈線文土器に後出するとされる凹線文土器の伴出を見る。この点は8層をそれ以下と分別する今一つの根拠とはなりうるが、当該堆積物になお若干の時間幅を想起させるものである。凹線文土器の点数は有文土器の約1割を占めるが、第1表にはこれを別途抜粋して「伴凹線文」とし、そのの負荷される器種を概念的に配置して示した。また、併載して「口縁部形態依存度」を百分率を用いて表示したが、これは細分される口縁部形態の各器種毎に占める量比を算出したものである。したがって、全体に対する比率はその層における有文土器の器種組成を示すが、口縁部形態依存度は一器種における形態学的異同を各層を通じて比較する上で有意となる。手始めにそれぞれの器種のとる主要な口縁部形態を層序に従って追求し、それらを型式学的観点より跡付けよう。

a) I類の型式学的変遷観 I類口縁部形態の遷移状況は比較的スムーズで、波状口縁深鉢では、「23層」においてI1類内彎口縁とI2類内彎内屈口縁が併存し、若干の内屈口縁I3類aがみられ、続く「9層」ではそれらに代わって内屈口縁が増加、その種もI3類bおよびI3類cが台頭する。上

第1表 有文土器各器種間口縁部形態消長表

		鉢形土器Ⅰ類																		
器種 口縁部形態	波状口縁深鉢								平口縁深鉢				波状口縁浅鉢				平口縁浅鉢			
	I 1a	I 1b	I 2a	I 2b	I 3a	I 3b	I 3c	I 1b	I 2a	I 2b	I 3b	I 3c	I 1b	I 3b	I 3c	I 1b	I 2b	I 3b	I 3c	
23層	1	14	10	4	2	0	0	2	10	14	0	0	1	0	0	4	2	1	0	
	1%	15%	11%	4%	2%			2%	11%	15%			1%			4%	2%	1%		
	3%	45%	32%	13%	6%			8%	38%	54%			100%			57%	29%	14%		
9層	0	11	4	0	1	3	5	1	2	0	1	11	0	0	2	1	5	0	4	
		7%	3%		1%	2%	3%	1%	1%		1%	7%			1%	1%	3%		3%	
		46%	17%		4%	13%	21%	6%	13%		6%	69%			100%	10%	50%		40%	
8層	0	2	1	0	0	5	7	0	0	0	3	27	0	1	1	1	2	5	4	
		1%				2%	3%				10%	11%					1%	2%	2%	
		13%	7%			33%	47%				13%	90%		50%	50%		8%	17%	42%	33%
伴凹線文	—	—	—	—	—	—	△	—	—	—	△	○	—	—	△	—	—	△	○	

鉢形土器Ⅱ類												注口付土器Ⅰ類						注口Ⅱ類	
波状広口深鉢			広口深鉢			広口鉢			波状広口浅鉢			注口ⅠA		注口ⅠB		注口ⅠC		注ⅡA	注ⅡB
Ⅱ1	Ⅱ2	Ⅱ3	Ⅱ1	Ⅱ2	Ⅱ3	Ⅱ2	Ⅱ3	Ⅱ1	Ⅱ1	Ⅱ2	Ⅱ3	素縁	有段	有段	肥厚	有段	肥厚		
0	1	0	*	12	2	0	0	*	2	4		0	0	0	0	2	0	1	0
	1%			13%	2%				2%	4%						2%		1%	
	100%			86%	14%				33%	67%						100%		50%	
1	1	1	*	14	*	3	0	0	18	4		6	0	3	4	5	0	1	0
1%	1%	1%		9%		2%			11%	3%		4%		2%	3%	3%		1%	
33%	33%	33%		100%		100%			82%	18%		75%		23%	31%	100%		13%	
0	0	1	6	7	38	3	*	0	29	15		4	2	0	1	*	*	0	*
			2%	3%	15%	1%			11%	6%		2%	1%			0%			
			12%	14%	75%	100%			66%	34%		57%	29%		33%				
—	—	△	—	—	(○)	(○)	(○)	(△)	(△)	(△)		○	△	—	—	△	—	—	○

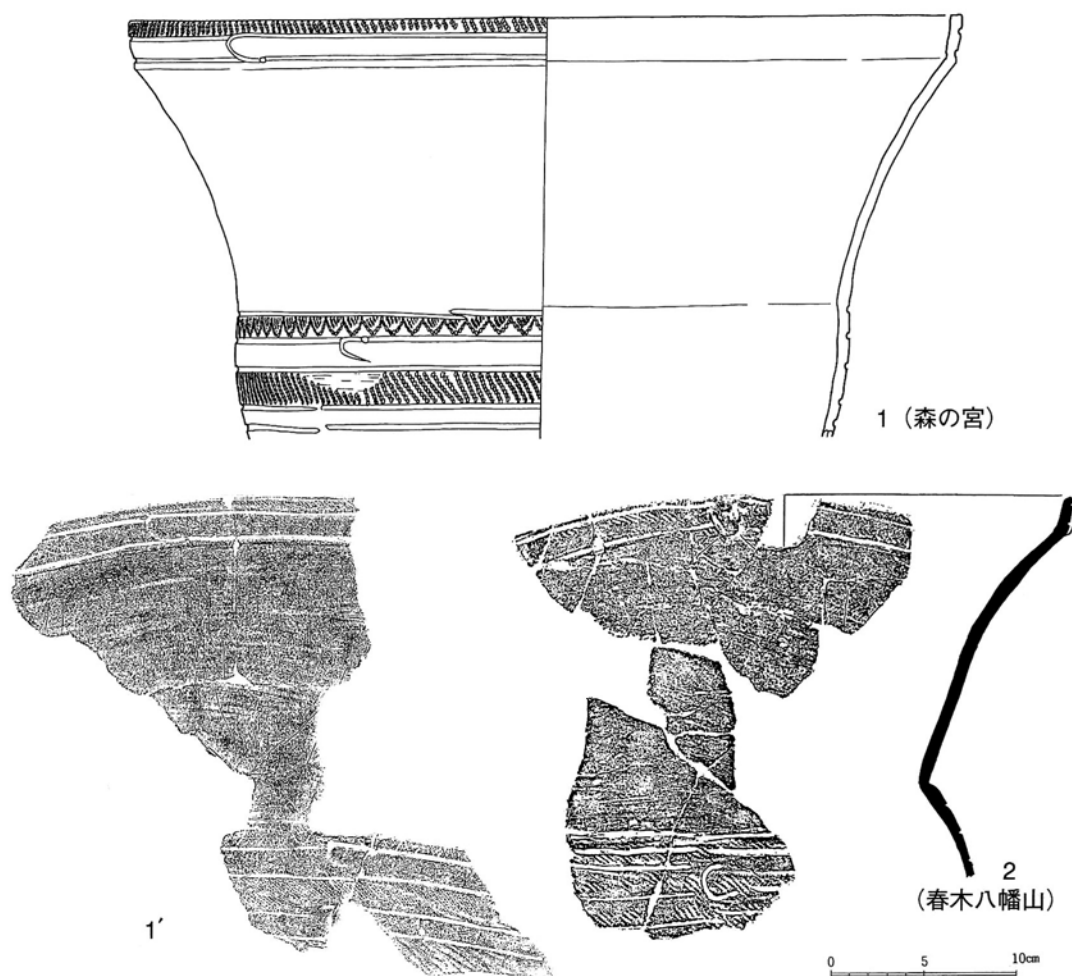
〔凡例1〕*は無文土器における存在を示す。

〔凡例2〕○主体、△少量、—微量またはナシ、括弧は凹線の施文稀少なもの。

〔凡例3〕「口縁部形態依存度」は、諸器種における各口縁部形態の占める比率を百分率で表示したもの。

位「8層」はさらに収斂化が進み有段口縁が減少、無段のⅠ3類cが大半となる。個々の土器に照らしてみると、SD451出土の第8図182はⅠ1類a、188がⅠ2類aにあたるが、前者は渦巻状のその意匠について崩れはみられるものの北白川上層式3期との関係を追跡可能、後者は文様構成と「6」字状文とをもって一乗寺K式との類似性を指摘できる。ただし、一乗寺K式の標徴とされる口縁部形態はⅠ3類a・bの有段口縁をとる3単位波頂であって、一方、4単位となる188には相違が認められる。また、「23層」相当層からは248のようなⅠ3類aが出土してはいるものの、その数は僅少で京都市・一乗寺向畑町遺跡の様相とは異なる点を指摘できる。同様にして一乗寺K式の範疇に包摂されてきたⅠ3類bは13層に現れ、9層に多く見受けられることから、年代的に下る位置づけが与えられよう。したがって、本遺跡におけるⅠ2類a>Ⅰ3類a→Ⅰ3類bといった図式から、所謂「一乗寺K式」の地域性認識とともに本態の再考が要請されることになる。その辺は後の概括で改めて整理しよう。

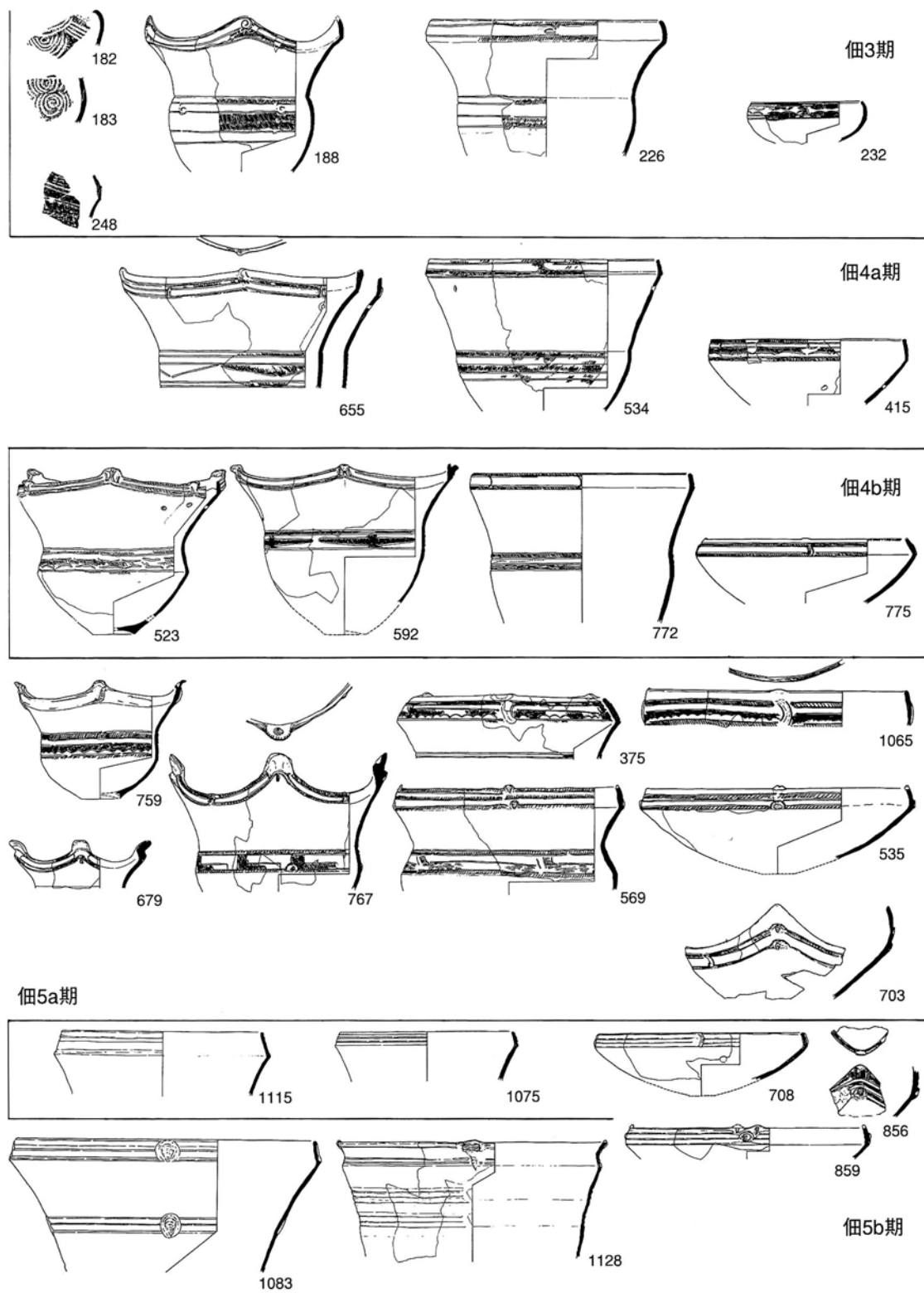
10層出土、Ⅰ3類bの口縁部形態をとる655の上半無文帯には頂部に刺突および刻みを施した凸帯が付されるが、以下の単位文は省略されている。胴部文様帯は間に磨消部分を置いて上中下と3つの縄文帯を保つ定型的な幅広型。中央縄文帯の下限沈線が斜行する動きは415の平口縁浅鉢にみる横長の下弦弧線文に通じよう。その初源は278のような横走沈線の継ぎ描き手法に求められ、232のような弧線意匠の存在がその定型的弧線文化を促進したものである。これらの上限沈線は232とは異なって多く水平を

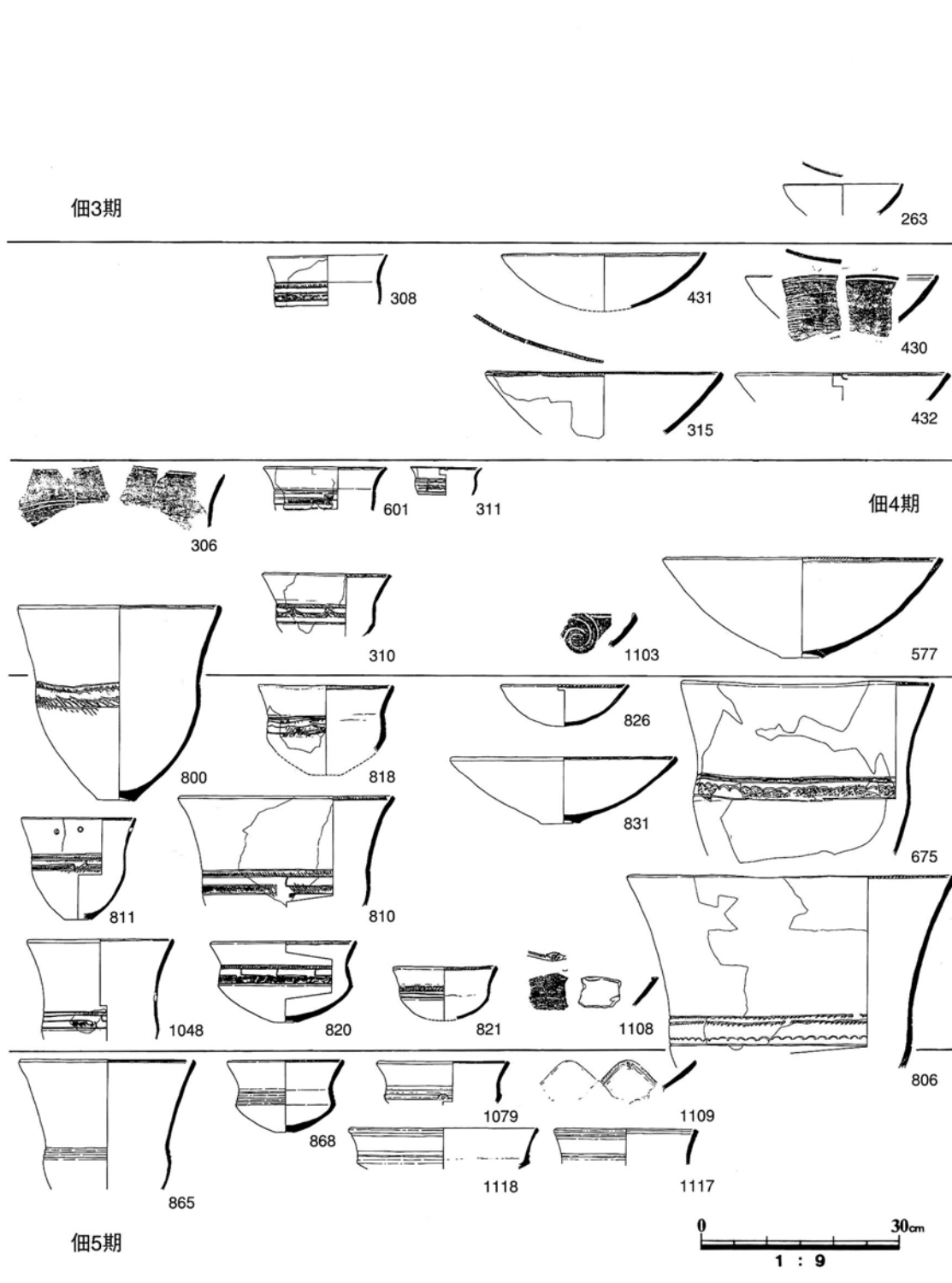


第7図 佃4期の平口縁深鉢 (Scale=1:4)

保つが、その要因として有力なのが最上縄文帯から垂下する逆「ノ」字状文である。これは188の胴部にある「6」字状渦巻文の退化したものと理解され、おそらくこの省略過程において523のような上下とも連動する弧線意匠が派生するものと考えられる。同様にして10層出土になる平口縁深鉢534の胴部文様帯には、415のⅠ2類b口縁部同様の逆「ノ」字状文が配されるが、それはⅠ3類cとなる同個体の口縁部にも幅狭型として組成されている。その事象は両者の通底性を代弁しよう。そこで口縁部の単位文を挟んだ上下を胴部の各縄文帯に見立てるならば、それぞれ最上帯、中央帯にあたろうから、最下帯の省略はここに用意されている。8層出土となる772は胴部の単位文とともにこれを全く省略して幅狭型としたものであるが、口縁部には「C」字状文が残り、構成を同期させつつも相違を見せている。なお、口縁部上下帯が斜刻帯として共通するのに対し、胴部は最上帯を斜刻帯、下帯を巻貝擬縄文帯とする。そもそも先行する188の胴部を省みれば、最上帯は結節部を回転施文することによって以下の縄文帯とは差違を表明しており、534と同器種同文様でありながら最上帯が依然として絡げ縄によって相対化されている大阪府・森の宮遺跡の例（第7図1、松尾1996）を示せば、その相違の帰結が772の胴部たる由来を補強しよう。一方、波状口縁深鉢では胴部の幅広い定型的構成は維持される傾向が強い。592などは口縁部形態上655に後出しそうであるのみならず、文様意匠上も連繋が窺われる例で、幅こそ狭めであるが定型的構成を保持している。中央帯下限沈線が半円形につまった下弦連弧文となる759も

第2節 佃遺跡出土縄文土器の編年－特に元住吉山式土器について－

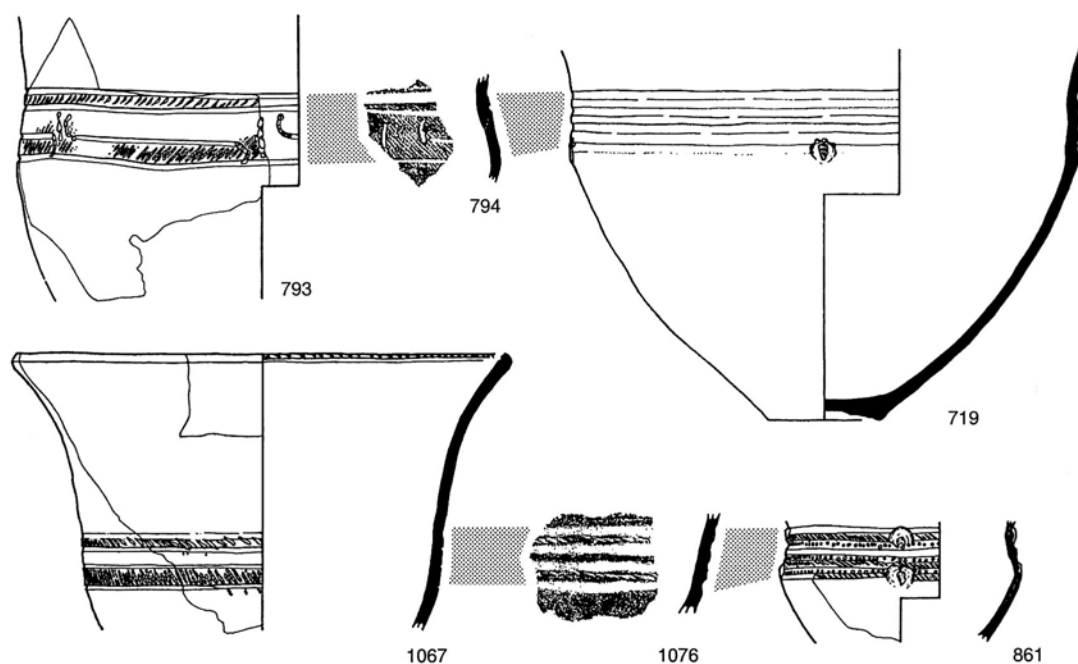




第8図 鉢形土器の変遷

8層出土でありながら幅広型、上下斜刻帯の定型的構成。すなわち、泉拓良氏が元住吉山Ⅰ式の新相とした一乗寺向畑町遺跡南部地区の資料（泉1989）に通じるものである。類似の意匠は8層中に散見され、平口縁深鉢375、平口縁浅鉢1065の有段口縁Ⅰ3類bにも見られる。先に同様の形態をとる口縁部は8層にいたり淘汰されてゆく様を波状口縁深鉢の変遷から見て取ったが、第1表を顧みて気づくのは、Ⅰ類浅鉢形土器における口縁部形態依存度の遷移にみる深鉢形土器のそれとの相違であり、8層にいたっても幅広のⅠ3類bにその多くを依存することが理解される。その遺存理由は、Ⅰ類浅鉢形土器が北白川上層式以来の幅広に内屈する口縁部形態を維持したまま変化しており、先行する415にみられるように、深鉢形土器胴部文様帯、特に後まで幅広型文様構成を維持する波状口縁深鉢のそれとの通底性が形成されることによると理解することができよう。なお、この解釈を指示するのは深鉢形土器頸胴部区画手法の型式学的変遷である。すなわち23層の188などは頸胴部界が明瞭な段によって泰然と画され、そこに沈線を施すが、9・10層においては同じ「段+沈線」でも、その段差が緩やかで、それ以外にくびれた部分を「沈線」のみで画するものが出現する。8層にいたっては専ら後者、「沈線」区画が主体であって、わずかに595のような波状口縁深鉢に「段+沈線」が認められるに過ぎない。ここに看取されるのは段の退嬰に代わる沈線表現の顕在化であるが、この変遷は浅鉢形土器に移設されたⅠ3類有段内屈口縁の在り方に整合する。先に534を題材として深鉢形土器における口縁部と胴部文様帯との通底性を示唆したが、口縁部に幅広型文様構成をもつ8層出土の375を媒体とすれば、759と1065の連関をしてⅠ類に見る深鉢形土器胴部と浅鉢形土器口縁部の親和的な関係性は求められるのである⁽¹⁾。

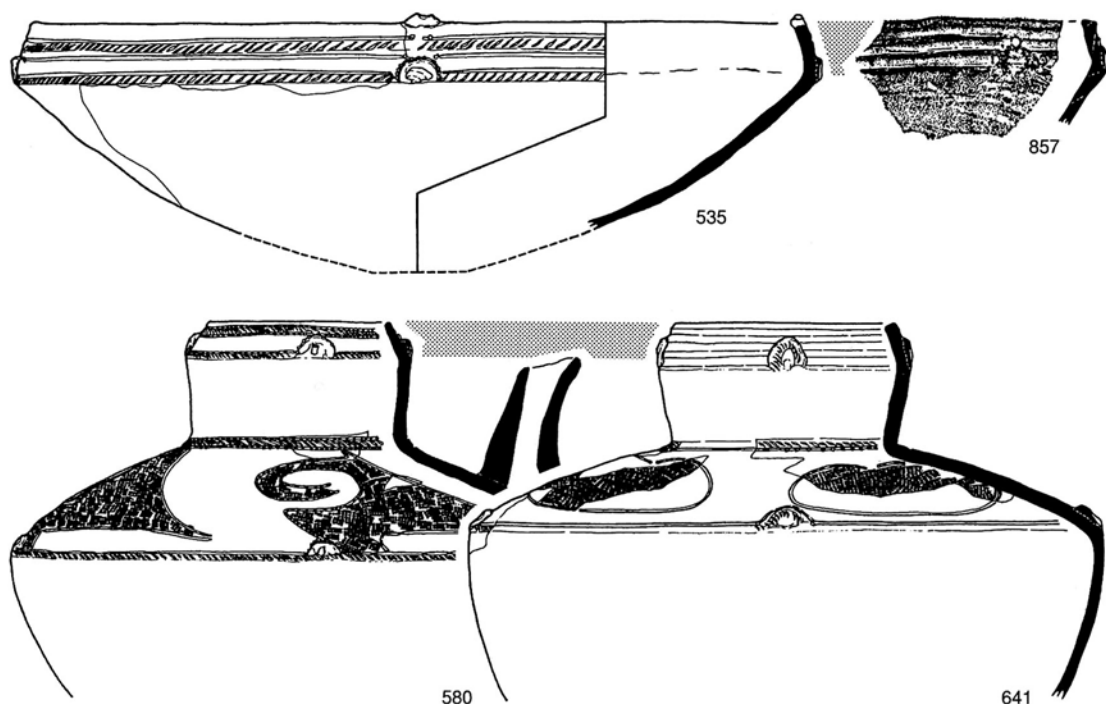
b) 凹線文土器群への移行（第9図） 375の口縁部文様は定型的下弦連弧文であるが、中央帯は6ヶ所で寸断され、その上限沈線が上下に折れてクランク状となっている。また、深鉢形土器胴部の1070は連弧文を下限に、より明瞭にクランク文を構成する。これら連弧文とクランク文が同居するものは稀少例であるが、両者の時間的に近いことを証左しよう。8層には半円形を呈する下弦連弧文とともにクランク文の出土が少なくないが、その荷担器種はⅠ類よりもむしろⅡ類に多く認められる。Ⅱ類



第9図 沈線文・凹線文相互文様帯の対応関係（Scale=1:3）

の広口深鉢は8層になりⅠ類深鉢と均衡するほどの組成率を占めるまでになるが、その胴部文様は専ら幅狭型で、上下帯を縄文ないし擬縄文帯とし、第3沈線を下弦連弧文や上弦弧線文、クランク文等にする。広口鉢も同様の文様を配すが、その出現は9層に遡上して幅広型の文様構成を確認できる。なお、306は9層出土の波状口縁広口深鉢であり、幅広型の定型的下弦連弧文を胴部文様としている。そもそもⅡ類は後期前葉以来、専ら無文土器の主要な形態であるが、23層においてわずかに浅鉢形土器の口唇部に垂直刻みが施されるのを契機とし(263)、9・10層では広口浅鉢口縁部の開口に伴う口唇部から口縁内面への施文部位の移動と刻みの斜位化が認められ、広口鉢等の器種においても、口縁部を外反させるⅡ2類をもって刻みを伴う有文化が促進される。8層の有文広口深鉢は明らかにこの延長上に位置づくもので、主要器種であるところの無文広口深鉢にⅠ類同様の胴部文様を配したものとして成立する。

上記の通りの幅狭型文様構成は、頸胴部界を沈線のみにて画するため、都合4本の沈線から構成される。片や同じ8層の伴凹線文の深鉢形土器胴部719も描線は巻貝を用いた凹線ながら4本構成。1076も4本からなる深鉢胴部であるが、第1-2、第3-4凹線間に斜刻帯が配される。これまで刻みが縄文施文の代替要素として派生してきたことを考慮すれば、この個体の斜刻帯の位置は、幅狭型文様構成の最上帯と最下帯にあたるものとして首肯できよう。なお、これらの胴部と親和的關係を認めうるⅠ3類bの平口縁浅鉢口縁部もその沈線数に従って3本の凹線(857)、8層に盛興し同じ口縁部形態をもつ有頸型注口付土器もまた3本凹線を採用する(641)。このように、それまでの沈線文と伴凹線文の一群との間には、器種間における文様構成に連繋をみることができる。しかしながら両者のヒアタスは描線施文の工具を異にして尚大きい。これを繋ぐ資料に794の深鉢胴部片がある。文様は沈線で描かれており、その構成は幅狭型のクランク文であるが、頸胴部界に一条の凹線を配すことにより区画としている。すなわち両者の共存例は凹線文の新規派生に対してこの種の土器の果たした役割を示すものであろう。クランク文のⅡ類に一般的なことから、この器種は広口深鉢と推定されるが、その頸胴部界に一条の凹線を配すものを検索すると、その無文土器が8層にいたって顕在化してくることに注意が向く。この出自



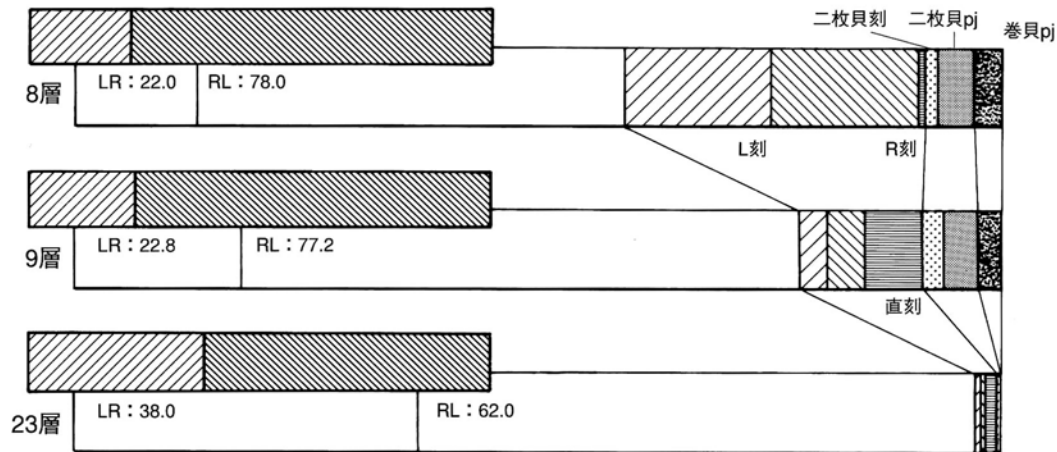
を考察するにあたってやはり重要なのが、有文土器において認められた頸胴部界区画手法の変遷で、この場合沈線が伴うことがないので段→一条凹線という型式学の想定が可能である。事実、9層には348のように横走る巻貝条痕によって段を作出する広口深鉢が存在する。23層においてはさほど明瞭なものとは認められず、くびれた頸部から外反する口縁部が伸び上がる。むしろ胴部に縄文のみを施すものに段が設けられるものが多い。この器種は23層において全組成の1割近くを荷っているが、9層にいたり半減し、そのまま見られなくなるから、その無文土器への移譲過程において一部採用された手法と仮定するのが妥当であろう。第6図の組成表に顕れる変化については先にも略記したが、23層と9・10層間に有文、無文土器の比率に大きな変化が認められる。すなわち23層においてはそれぞれ10%を占める有文、縄文に対し、無文が79%、一方の9層では有文の比率が倍増して26%、縄文5%となり、無文は67%と減少する。23層に近い時間帯の一括資料である京都大学本部構内遺跡AW25区では有文：無文＝22：78と千葉豊氏が報告しており（千葉ほか1997）、これに先行する京都府舞鶴市桑飼下遺跡の北白川上層式3期の同比は415：75.2であると渡辺誠氏が算出している（渡辺1975）ので、23層の値は偏差なく安定したものと考えてよからう。一方の9層の値に対比すべき良好なデータがないが、8層にいたってもさほど変化なく無文が6～7割の比を保っていることから、ここに顕れた有文土器の増加という現象を過小評価することはできない。この変化においてはⅠ・Ⅱ類の比は変わらずに有・無文比だけがかわっているが、9・10層から8層への変化は比較的安定した有・無文比に対し、Ⅰ・Ⅱ類比が、後者への依存を多くすることによって明らかとなる。この傾向は隣接するL20区の人工層位の在り方からも検証される。したがって、この有文土器の増加現象は、9層におけるⅡ類の有文化、そしてその主体を占めるところの広口深鉢への8層における施文が背景になっているものと推察されよう。この関係を踏まえた上で、無文広口深鉢胴部の一条凹線が有文広口深鉢へ、凹線文として採用される過程に説明を与えることができる。

c) 有文土器の粗製化 一般に西日本では後期後葉から土器の無文化が促進するとされるが、再度本遺跡の状況に注意しておきたいのは、8層に移行するにしたがい、有文土器の比率が増す点である。

工具 層位	施文具						調整具	
	縄文		二枚貝		巻貝		二枚貝	巻貝
	RL	LR	放射肋	素縁				
23層	I 2	I 1	刻			刺突	ナデ	条痕
9層	I 2・3	Ⅱ類	刻	Ⅱ類 pj	Ⅱ類 直刻	刺突	pj	ナデ 条痕
8層	I 3	Ⅱ類		pj	斜刻		pj	ナデ 凹線 条痕
凹線文					斜刻		注口 pj	ナデ 凹線 条痕

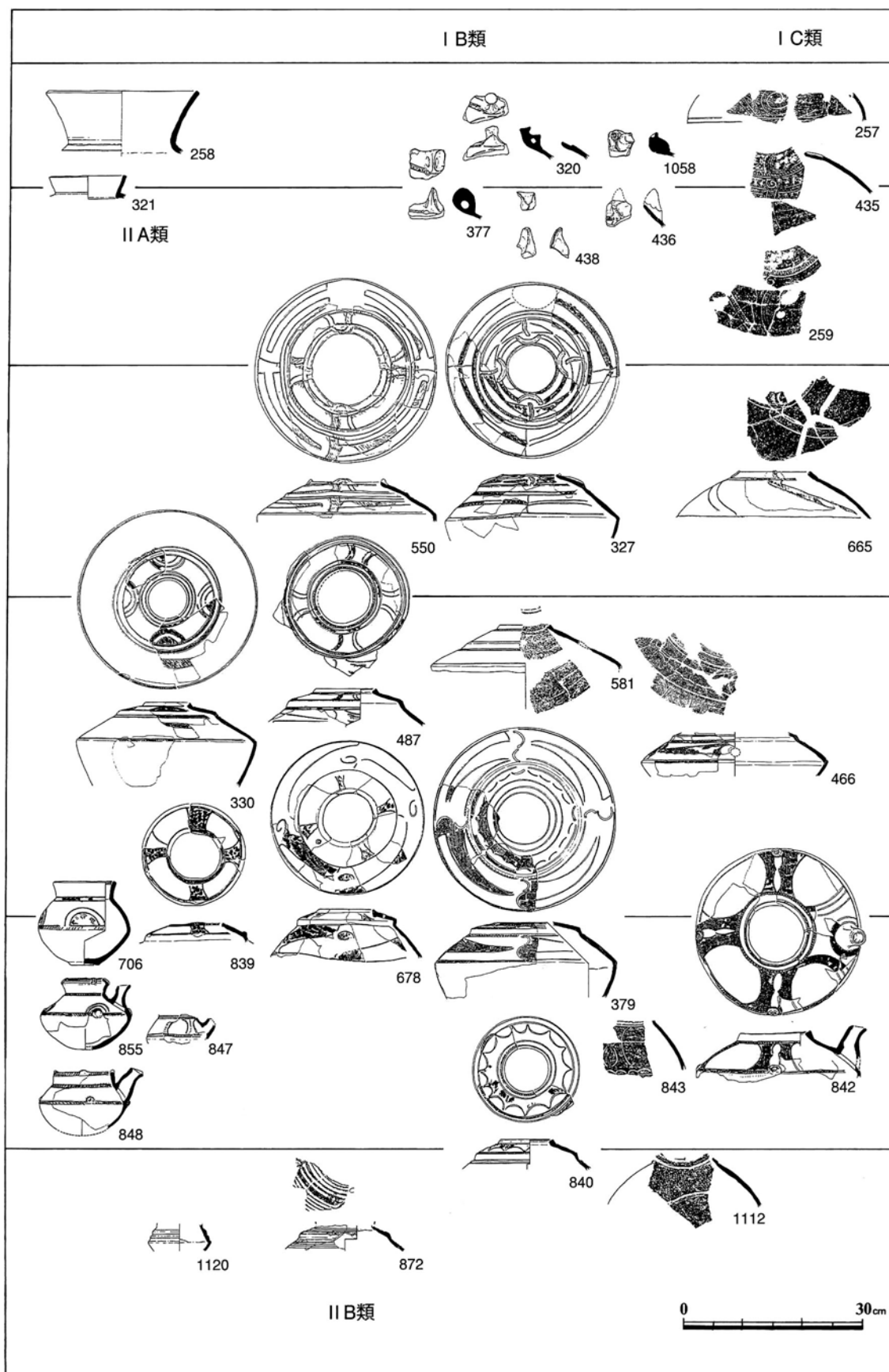
〔凡例〕各工具の内容は、上段に荷われる主な器種および口縁部形態を示し、下段にその手法を表している。なお、「pj」とは擬縄文の略である。

第10図 土器製作者の道具箱の変化

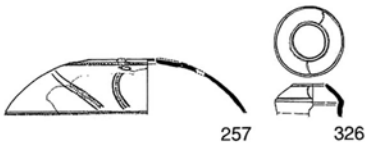
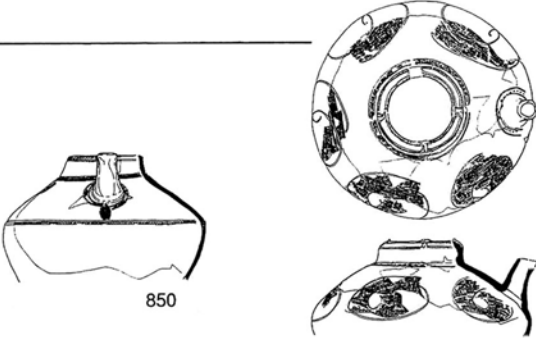
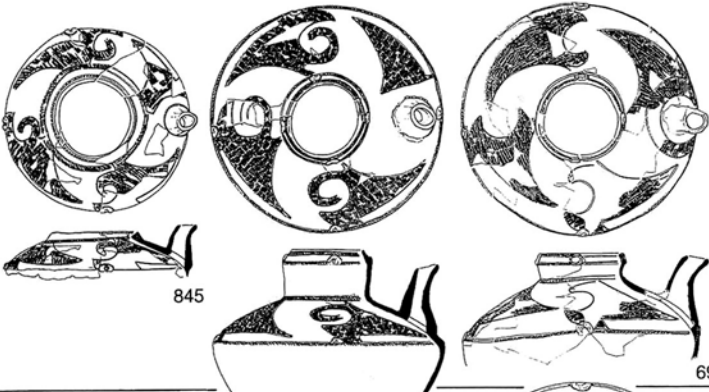
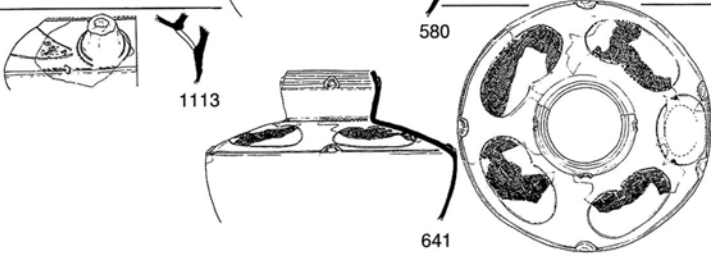


第11図 文様要素の消長 凡例：L刻・R刻はそれぞれ左下斜刻、右下斜刻を表す。
p jは擬縄文の略とする。

そしてその実体は器種構成の多様性であって、従来の施文対象でない器種にも文様が施されることが背景となっている。しかしながら、その一方で確実に起こっていることは施文技術自体の退却であり、それを層位的に追求したのが第10・11図である。すなわち、文様を構成する技術要素を各器種における負荷関係から集計したもので、前者の図ではその工具と使用法の変化を模式化した。ここで取り上げられる施文具は縄文、二枚貝⁽²⁾、そして巻貝の三者である。23層では器種を問わずに専ら縄文が多用され、その6割が直前段4本撚りの単節右撚り（RL）である。泉拓良氏の分析によると北白川上層式3期はLRが大半を占める（泉1980）が、本層中におけるLRの比の多くはI1類口縁とされる北白川上層式3期に通じるものに負荷されており、両者の技術的相関性の高さを窺わせる。また、それらが線描後に充填されるのに対し、RLの場合は施文後磨消とされるのが一般的である。この施文手法は9層にいたっても変化せず、むしろRL磨消縄文に収斂する。この結果もまた、泉氏による撚り変化の指摘に整合するが、8層でもRL優位傾向が続く事実は、京都府・森山遺跡の例（岡田1997）でも示したように、本遺跡でも氏の見解と異なる点である。ただし、この生起背景はRL縄文自体の増加というよりも、LR縄文の衰退⁽³⁾と工具の多様化の結果であって、貝類施文具に多く依存する部分が増したことによる。特に二枚貝腹縁による口縁部内面刻みの多用は、II類土器の有文化と密接に相関している。二枚貝には放射肋をもち腹縁が鋸歯状になるものと素縁のものとがあり、前者は少量ながら23層で刻みとして用いられ、9層において別途背面押捺擬縄文を獲得する。素縁の二枚貝は腹縁による刻み以外の使用法を考えにくい。垂直刻みから斜刻みへと施文の連続性を獲得するのと同時に、放射肋二枚貝に代わって、8層に確実に増加をみせる⁽⁴⁾。一方、巻貝は23層の注口付土器に端部折れ面を刺突したものが僅かに見られるだけで盛興せず、9層の側面回転擬縄文となって多用される。そのほかにも波状口縁深鉢の突起頂部の刺突などは巻貝が用いられるので、その需要は9層以降拡大したと解してよい。その結果8層における縄文施文率は半減、その点はI類の動向と軌を一にするようである。II類の増加とともに盛興する貝類施文具は、そもそも既存の調整具に共通し、その意味では土器製作全般における工具を限定する方向に向かう。また、その使用法も必要空間への対処法としての充填施文で、なおかつ点的動作から線的動作へと移行するなど、そこには有文土器における施文省力化を読み取ることが可能である。



第12図 注口付土器の変遷

I A類	細分	文化期
 738 319	3a	佃3期
 257 326	3b	
 850 854	4a	佃4期
	4b	
 845 691	5a	佃5期
 1113 641	5b	

d) 注口付土器の変遷

組成比率は決して高くないが、当該期に特徴的な器種に注口付土器がある。第1表からそれらの層位的出土状況を追求すると、23層における有段口縁ⅠC類およびⅡA類、9層における有段および肥厚口縁のⅠB類、そして8層の有段口縁ⅠA類といった大枠における器種の消長をたどることができ、これを型式学に跡付けたものが第13図になる。23層近似堆積からの注口付土器口縁部の出土はいたって少ないが、259はⅠC類となる14層出土例である。口縁部は完存しないが、ドーム状の体部の上端は有段口縁の無文帯とし、そこに逆「ノ」字状凸帯を配置する。絡げ縄を用いた縄文帯をはさんだ直下の「6」字状文は188の波状口縁深鉢なりとの時間的に近接した関係を語ろう。凸帯は4単位で一周するものと推定されるが、それらがすべて凸帯になるものと考えより、直交する一対は436、438にみるような突起状を呈するものと考えられる。さらにまたその祖形を追求するならば、320等を介して立体的な738が注意されるし、その形態はすなわち319のような加曾利B1式の把手に起源することが窺われよう。これらの突起は総じて9層以上よりの出土になるが、京大本部構内AW25区の例（千葉ほか1997）等から判断して、23層段階に置いて矛盾はなからう。これら突起は異形態への転移物として多様性をみせはするものの、急速に退縮するようで、10層出土のⅠB類550の凸帯にその収斂を想定することができる。なお、この個体の凸帯は退化しつつも2個一対の配置を保持している上、その直下に交差対弦の弧線文が描かれており、259等の「6」字状文からの変化を希求できよう。ⅠC類の665も凸帯頂部に刺突が見られる点で波状口縁深鉢の655に同期しており、さらに単位文様も省略しているところに同様の時期を想定しう。327などは438の突起から凸帯への変化を端的に表す資料で、有段口縁の上下に配置された馬蹄形凸帯と「ノ」字状凸帯は、438の稜となり刻みを施された部分を平面化したに過ぎないことが判る。また、凸帯も4ヶ所同様のものが配置される点もより新しい傾向といえよう。550の口縁部下半帯の「ハ」字状意匠は「ノ」字状文の反転されたものと推察することができるが、これも突起の規制していた対構成の崩壊が遠因したものと考えられよう。487の口縁部下半帯もまた「ハ」字状文であるが、それに付随する単位文はもはや残存しない。口縁部上半帯は断面三角形に肥厚させ、その内向する面に斜刻帯を配すが、その原理はⅡ類広口浅鉢と同様で、550にあるような口唇部刻みが、肥厚に伴って視点を移さぬように内側へ移動したものであろう。したがって、Ⅱ類広口浅鉢における施文位置の変遷観に整合する形で、注口付土器ⅠB類における有段口縁から肥厚口縁への型式学的な変化を看取することができる。同様にして肥厚口縁の581は8層出土ではあるが、凸帯の剥離した痕跡が在り、327等からの系譜を知るが、それを取り巻く口縁部下半帯の文様は胴部と同意匠で、そこに互換性の発現を看取できる。また、口縁部文様は反転を起しているが、それ類似の意匠は466の胴部に使われるほか、842、845、580のそれもここから系譜を引けよう。8層の主体はⅠA類であるが、口縁部に有段口縁がみられることは先に指摘した通りである。その屈曲部には巻貝刺突なりを施した瘤状突起が配置されるが、それは胴部の屈曲部にも同様にして配置され、文様構成上の縦軸を形成する。そもそも、この瘤状突起は581の口縁部下半帯にあるような凸帯が退縮したのと考えられ、667のような形態を経、同時に形成されたⅠB類の口縁－胴部相互互換性により胴部同部位に転移したものであろう。この手の瘤状突起は波状口縁深鉢767胴部のほか、平口縁浅鉢535の口縁部にもみられ、その型式学的併行関係を指示するものであると同時に、元住吉山Ⅱ式の成立に関する各器種文様帯の関係を傍証するものである。

凹線施文の注口付土器に関しては、その幅広い胴部文様帯に巻貝回転擬縄文を充填する文様が残ることは先学の指摘してきたとおりで、ここにおいてもその型式学的変化を円滑に見て取ることができる。

一方で、872のようにⅠB類の体部をもつものには多重に凹線を巡らすものをみるが、この個体の上端破断部の状態と、島根県・森遺跡（柳浦1994）や富山県・井口遺跡（橋本ほか1980）の類例から判断して、口縁部はラッパ状に広がって立ち上がるⅡB類となるものと推察される。これまで口縁部と胴部を画してきた肩部無文帯は、本個体では緩い段に過ぎなくなり、両者の文様も同様にして区別が希薄になる。おそらく内向する面に斜刻帯をもつ肥厚口縁がⅡ類と通底性を有した段階で、新たに口縁部上半帯のみの離脱が開始されたのであろう。それに伴い口縁部下半帯は必然的に胴部と一体化を図らざるをえなくなる。706の壺形土器などは、口縁部におけるその過程の一端を示す好例のⅡA類であり、鉢形土器のみならず、ここにも8層段階におけるⅡ類の台頭を認めることができるのである。

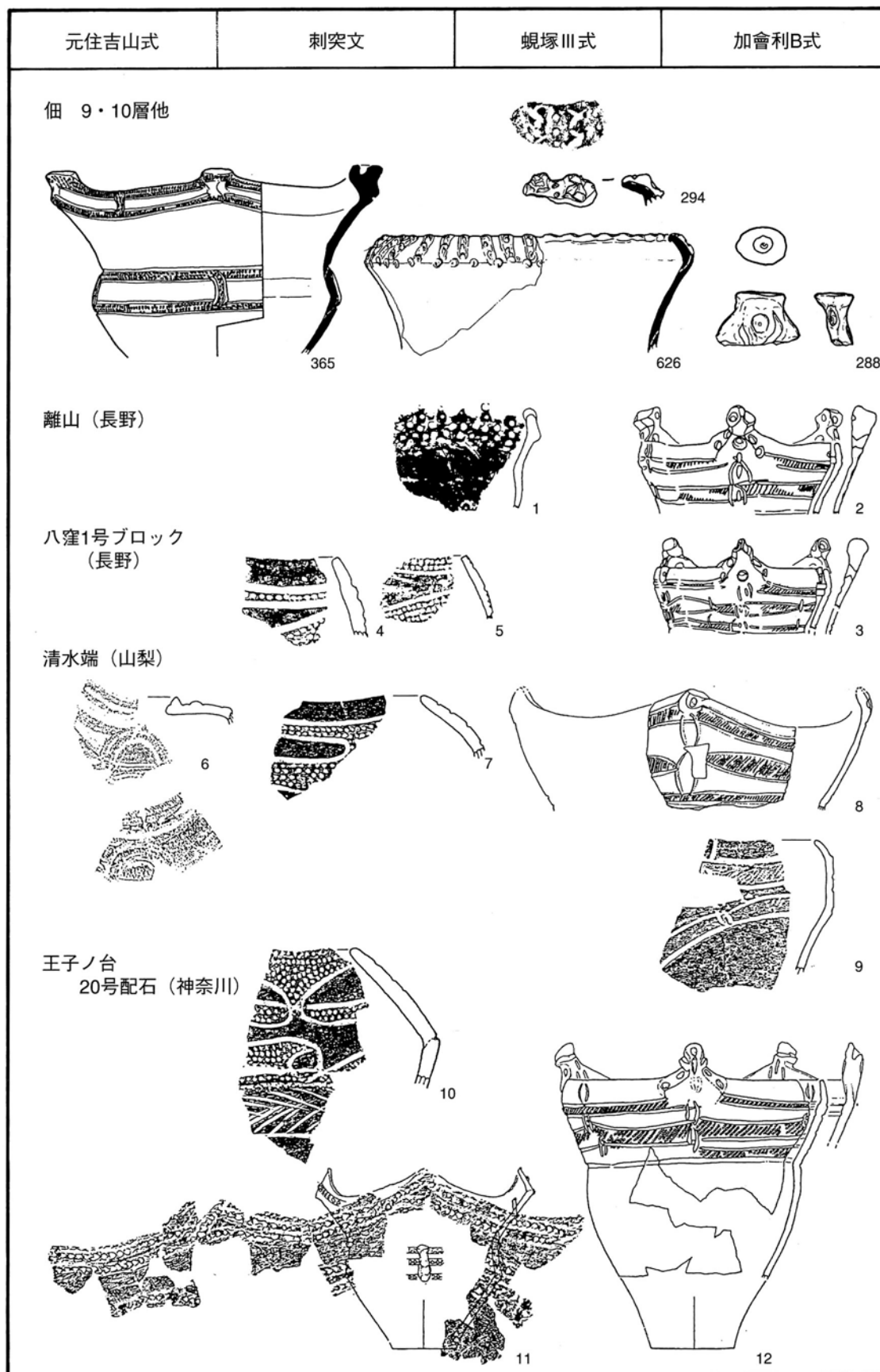
3. 各層出土の異系統土器の評価（第13図）

本遺跡各層からは他地域の影響下に製作されたものと考えられる異系統土器が少なからず伴出している。それらの由縁を遡及することにより、広域編年網における各層の年代的位置づけを求め、近畿地方諸型式の相対化に備えたい。

23層下位遺構S D451出土の207は波状口縁浅鉢であるが、内面に文様帯を有しており、変容が大きいとはいえ関東地方・加曾利B1式のそれとの関係を示唆する個体である。14層にもまた、加曾利B1式注口付土器の模倣品とみなせるものが存在することから、本層にその併行関係を支持する一定点が求められよう。従来より加曾利B1式との併行関係は、北白川上層式3期との指摘がなされており（泉1980）、本層における出土状況もそれを全く否定するものではない。

9層には西関東地方の加曾利B2式を特徴づける突起が出土している（288）。安孫子昭二氏の変遷観にいうところの小仙塚段階に相当しよう（安孫子1988）。同層には東海地方において蜷塚Ⅲ式⁽⁵⁾に比定される有刻縦位隆帯を貼付する平口縁深鉢（294）もみられるが、これと類似の状況が神奈川県・王子ノ台遺跡20号配石遺構に両者の共伴例として確認される。当遺構出土の資料は秋田かな子氏によって加曾利B2式中段階という位置づけを与えられているから（秋田1996）、両者の関係に矛盾はなかろう。ただし、王子ノ台例においては、客体になる蜷塚Ⅲ式は波状口縁深鉢である点、様相を異にする（第14図11）。現在までのところ佃遺跡を西限とする他地域への分布は、もっぱら平口縁深鉢を介したものであり、波状口縁となる器種は知られていない⁽⁶⁾。その種のヴァリエーションをみせるのは東海地方でも、三河・遠江地域に限られており、それとの関係からはかつても王子ノ台例は興味深い。同遺構中にそろばん玉形をした鉢で、縄文に代わって刺突文の充填されたものがみられる（第14図10）。この種の施文手法は中部高地方の同器種に散見される手法であり、百瀬長秀氏により加曾利B2式前半段階と評価される長野県・八窪遺跡1号ブロックにも見いだされる（百瀬1988）。同県の離山遺跡には、縦位隆帯貼付の平口縁部にそれがみられる例があり、その施文手法と東海地方的器種の折衷型として評価されよう（第14図1）。佃遺跡の365等はその近畿地方的器種との折衷型である。いずれにせよ、これらが広域分布を見せる器種との折衷である点には注意が向く。

山梨県・清水端遺跡には、加曾利B1からB2式前半にかけての資料がまとまっており、刺突文のそろばん玉形鉢等も認められるが、それ以外に元住吉山式注口付土器ⅠB類を伴出している（第14図6）。佃遺跡の9・10層段階に比定されるものであるから、その併行関係は矛盾するものではない。一方、当遺跡の第14図8・9等は、加曾利B2式としては異例となるであろう波状口縁深鉢で、内屈する口縁波頂部無文帯に配された逆「ノ」字状凸帯や、器形と文様帯との関係は、一乗寺K式との関係を示唆する



第13図 佃4期異系統土器の連関（縮尺不同）

に充分であろう。したがって、八窪遺跡の第14図2・3は、3単位の突起直下に円孔が穿たれるが、これと類似の特徴が9・10層の波状口縁深鉢394にも見いだされる⁽⁷⁾点は偶然とすることができないであろうし、口唇部に刻みをもつ有段内屈口縁の分布が、東偏する傾向をもつことも同様に考えられよう。以上に概観したような共伴関係を越えた型式間交渉関係に基づくならば、佃遺跡の9・10層は関東地方の加曾利B2式前半までに併行する年代を与えられることになるだろう。

東海地方との関係は、蜆塚Ⅲ式を介して若干示唆したが、有刻縦位隆帯をもつ土器は、時間幅をもって型式学的に遷移するので、単純に併行関係を説く標識とはできない。同型式の一組成となる内屈口縁に1本の沈線を配す器種は、増子康真氏によって紹介された岐阜県・道下遺跡住居跡出土資料を定点として変遷観がとらえられ、他地域との併行関係が指摘された(増子1994)。同氏は当器種をもって蜆塚KⅡ式とすることを支持するが、その組成は不明瞭で、有刻隆帯をもつ土器群との関係が整理されていない。ただし、西北出式から道下5号住居跡、その後に長谷式という変遷観は概ね首肯されよう。佃遺跡には内屈口縁に沈線を1本のみ配すものは768の1点、京都府・森山遺跡においても1点のみしかみられないので(岡田1997)、沈線2本を基調とする元住吉山Ⅰ式との地域的相対化ははかられようが、突起の変化の方向性は類似するので、その併行関係は、9・10層と道下5号住居跡、8層と長谷式ということになり、8層段階における凹線の部分的採用といった共通性が注目される。

北陸地方では、23層段階に併行しそうな資料として石川県・馬替遺跡が挙げられようが、適当な型式名称がない(南1993)。近接する米泉遺跡の資料は豊富でありながらも、馬替遺跡にみられるような資料を僅かにしか含まず、第6号住居跡には波状口縁深鉢Ⅰ3類b有段口縁、注口付土器ⅠB類が共伴し、P41には波状口縁舟形浅鉢および注口付土器ⅠB類、第5号住居跡にも8層段階にあたる波状口縁深鉢が出土していることから、酒見式各段階との併行関係をはかることができる(西野ほか1989)。当報告書において西野秀和氏の姿勢が示されてはいるものの、北陸地方における型式論的研究が立ち後れている観は否めない。

視点を西方に移すが、瀬戸内地方では当該期の資料が少ない。岡山県・彦崎貝塚南地点を標式とした彦崎K2式(池葉須1971)は、千葉豊氏によって掲げられる結節縄文や刺突沈線文等の技術的特徴(千葉1992)から23層段階に相当するものとなろうが、その内容は依然具体的に把握されることがない。9・10層に併行するのは、小林行雄氏らによって「元住吉山式」が提唱された時点で紹介された岡山県・竹原貝塚の一群の土器が相当しよう(佐々木・小林1937)。また、山口県・岩田遺跡で「第二類」とされた土器群(潮見1960)も注口付土器や深鉢胴部の文様からこれに同期するものと考えられる。なお、前者については研究史上、元住吉山式として把握されたが、巻貝回転擬縄文の多用等、佃遺跡の様相とは明らかに異なっており、地域的相違として「竹原式」と呼称する妥当性は認められよう。さらに、泉氏もとりあげた広島県・大宮遺跡の広口深鉢(泉1981)は8層段階に比定されよう。ただし、当期の内容は尚一層詳らかでない。

東北九州地方では水ノ江和同氏により概期編年の整理がはかられている。従来北白川上層式3期に併行させてきた北久根山式併行期の次に福岡県・松丸D遺跡SX3出土土器をあて、引き続き西平Ⅰ式、同Ⅱ式、太郎迫式と変遷すると説く(水ノ江1992)。依然として地域性の問題が解消されているとは思えないが、その概要は首肯できよう。先の岩田遺跡第二類には西平Ⅰ式が伴うほか、兵庫県・砂連尾遺跡でも西平Ⅰ式が佃遺跡の9・10層相当の土器と共伴出土しており⁽⁸⁾、その併行関係を確立する。大分県・杉園遺跡では、肥厚口縁と口縁部下限瘤状突起をもつⅠB類の元住吉山式注口付土器が、西平

第2表 広域土器編年対照表

東北九州	中部 瀬戸内	個遺跡 文化期	近畿西部	京都盆地	北陸	東海	関東
北久根山式 併行	彦崎K2式	個3期 (23層)	個下層期	(京大AW25)	(馬替)	八王子式	加曾利 B1式
(松丸SX7)	+		(個3b期)			+	
西平Ⅰ式	竹原式	個4期 (9層)	(個4a期)	一乗寺K式	酒見式 (米泉6住)	西北出式 / 蜆塚Ⅲ式	加曾利 B2式
西平Ⅱ式			元住吉山Ⅰ式 1期	(森山SB04)	酒見式 (米泉4住)	(道下5住) / 蜆塚Ⅲ	
太郎迫式	(大宮)	個5期 (8層)	元住吉山Ⅰ式 2期	(森山SB11)	酒見Ⅱ式 (米泉5住)	長谷式	加曾利 B3式
三万田式	馬取式		元住吉山Ⅱ式	(森山SK35)	井口Ⅰ式	+	曾谷式

Ⅱ式に伴出しており（綿貫1991）、継続的に併行関係をとらえられる。なお、個遺跡でも中層より太郎迫式に類似するもの（1073）が出土しているが、その8層段階に併行するものと考えてよからう。

以上を整理したものが第2表となる。

4. 元住吉山式土器の再定立

先に南区の層位的出土状況と型式学とをもって、各器種数段階にわたる変遷観を示し、それらを統ずる型式論を展開した。これらは層位に基づく形で大きく三期に分離され、それぞれが型式学的に二分されることによって、都合6つの階梯を設けることになった。個遺跡における文化期概念を別途用意しているが、これとの対応を図れば、23層は個3期、9・10層は個4期、そして8層が個5期に相当する。それぞれの型式論的細分を認める立場から、各文化期にアルファベットによる符号を与え、既存の型式との対比をおこなおう。

個3期は先にも記したように北白川上層式3期から一乗寺K式に類似が求められる。しかしながらその様相は決して単純ではなく、182、183は従来の北白川上層式3期に比定されるものであるが、口縁部および胴部に描かれる半円状弧線を多重に配す意匠は同心円文を分割描写したものとして、奈良県・竹内遺跡1985年度調査第7地点のまとまり（松田1986）より新しい傾向を有すと判断できる。大阪府・春木八幡山遺跡や奈良県・上島野遺跡の類似意匠に着目すれば、それらの波頂部には突起ないし凹点が配されることから、本個体についてもその例外ではなかろう。その点は一乗寺K式における波頂部凸帯との関連を窺わせる。表採資料ではあるが上島野遺跡の資料は比較的まとまっており（岡崎ほか1993）、188のようなⅠ2類aの口縁部形態に結節縄文をもつ波状口縁深鉢が他にも認められ、これらが技術的に二系をなすことから年代的に共伴したものと考えてよからう。188の「6」字状文が大きく渦状に巻き込み、胴部最上帯が結節縄文帯である点は、298にみるような絡げ縄帯が標徴の一乗寺K式に若干先行すると理解することができ、これらをもって北白川上層式3期から一乗寺K式への移行期を表すものと評価しうる。しかしながら結節縄文→絡げ縄という序列を想定した場合、23層ないしその主要遺構

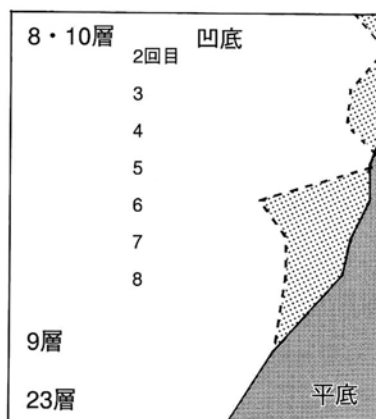
黒色地山を切る流路(SD451)							
縄文地深鉢形土器							
部位	頸胸部		胸部	胸部小計	口縁部	合計	備考
縄文	段	くびれ	沈線		内屈		
LR	0	4	0	7	11	0	11
LR結節縄文	1	0	1	4	6	2	8
LR絡げ縄	1	0	0	3	4	0	4
LR小計	2	4	1	14	21	2	23
RL	1	2	0	11	14	2	16
RL結節縄文	0	1	0	3	4	1	5
RL絡げ縄	7	0	0	4	11	1	12
RL小計	8	3	0	18	29	4	33
合計	10	7	1	32	50	6	56

第14図 SD451縄文地土器における技法との相関

り、その意ではこれを単純な型式学的序列とするよりも、技術的二系が共存する様相を看取するほうが理解しやすい。すなわち先に波状口縁深鉢でみた関係と同様の仮定にいたる。このほかに底部形態についても平底：凹底＝4：6といった関係が認められることから（第16図）、当該期を時間幅のあるものとするよりは、むしろその一括性を評価しておく方が現段階では懸命であろう。これを既存の型式概念に照らせば、この状況は先に示したような移行期という評価を与えざるをえない。しかしながら、現状において北白川上層式3期と一乗寺K式の上下限が明分できる遺跡としての事実はないことからすれば、この技術的二系の共存状況を評価する適当な型式名はなく、今後の便宜を考え、作業仮説として「佃下層期」を設定したい。すなわち北白川上層式3期の新しい部分と一乗寺K式の古い様相それぞれの特徴を包摂した概念となるが、一乗寺向畑町遺跡北部地区の資料が公表されていない現在（佐原1961）、その具体的関係については詳論し得ない。ただし標式資料である一乗寺K式に対して、佃遺跡の資料には相違が多いことは注意されるべき点で、波状口縁深鉢を例にとれば、波頂部および文様の単位数が4を基調にしているほか一乗寺K式の指標ともいえる有段内屈口縁が稀少である点は大きく、他に胸部が球胴状にはる点も、腹部を明瞭に屈曲させる前者とは異なる。腹部球胴状のつくりは積上げ技法の相違に基づくものであろうが、その基底となるのは底部であって、一乗寺向畑町遺跡北部地区出土の底部がほとんど平底なのに対し、23層出土の58%が凹底、平底は42%と半分を割る。このことから球胴状の胴部形態と凹底の相関性を指摘することもあながち否定されまい。阿部芳郎氏は類似のことを津島岡大遺跡の資料を検討する際に示唆している（阿部1994）。なお瀬戸内地方では先行する時期から凹底を用い、一方の北白川上層式は平底を一般的形態としていることから、近畿地方でも東西を向く両者間に技法的な相違点が多いことは注意されよう。佃下層期を評価するにあたっては、標式資料を尊重する限り一乗寺K式の範疇にいろことはできない。それゆえ、先の年代的問題のほか、近畿地方における地域性を考える上でも「佃下層期」設定の意義は認められる。

佃4期は一乗寺K式から元住吉山I式に比定される土器が認められる。従来、一乗寺K式の標徴として有段の口縁部形態があげられてきたが、本遺跡ではそれが二者に分かれた、層位的に分離して出土する状況を確認し得た。9層より出土する有段口縁はI3類bとしたもので、23層にI3類aは稀少なに対し、量的に安定して存在する点も様相を異にする。また、文様論としても、「6」字状ないし逆「ノ」字状沈線文を単位文として配することが一乗寺K式の標徴として知られてきたが、後者は明らかに9層より出土し、23層

であるSD451出土資料はなお年代幅をもつと考えざるをえない。SD451の縄文地深鉢形土器を部位形態と縄文種別毎に集計したものが第15図になるが、そこでは縄文部分処理の二態が伴出している。ところが、その一方の絡げ縄はRLと相関し、なお段状の頸胸部区画に限られてお

第15図 底部形態の消長
(直線はM20区、波線はL20区)

には認められない。したがって、従来いう一乗寺K式の標徴たる要素は少なくとも二分されることとなる。泉氏によれば、一乗寺K式の基準資料のひとつとして春木八幡山遺跡があげられるが（泉1981、1989）、『縄文土器大観』他しばしば取り上げられる平口縁深鉢は、口縁部に突起を貼付し、その頂部を刺突。胴部は中央縄文帯を分断するように「C」字状文が配されている（第7図2）。これらの特徴は明らかに佃4期に通じるものである。研究史に従えば、春木八幡山遺跡資料は佐原眞・堅田直両氏により「元住吉山Ⅰ式」と評価されており（堅田1965）、佐原氏は元住吉山Ⅰ式の先行型式とした「一乗寺KⅠ式」と弁別していることになる。ここに一部混迷した状況が認められるが、佐原氏の「一乗寺KⅠ式」と泉氏の「一乗寺K式」が異なる概念である点を考慮すれば、解決の道は拓かれよう。すなわち、佐原氏の「一乗寺KⅠ式」は一乗寺向畑町遺跡北部地区の一部の特徴的土器群に限定して用いられており、一方、泉氏の「一乗寺K式」はより広義に捉えられている。したがって、前者は佃3期に併行する概念となろうが、後者は佃3期および4期にまたがって用いられる。このことをもってしても、一乗寺K式の細分の方向性は示されたといえよう。

佃4期に認められる口縁部形態はⅠ3類b、Ⅰ3類cの二者であり、前者が一乗寺K式と関連する点は上記した。先に佃3期における有段口縁の地域的偏差を認めたが、佃4期におけるそれは、漸増拡散し、西限を香川県・永井遺跡（渡部1990）に、東限を石川県・米泉遺跡（西野ほか1989）、愛知県・八王子貝塚（西尾市1973）に求められることから、その形態差を直に地域性とみなすことは困難と思われる。そこで後者を一乗寺K式においても平口縁深鉢等には用いられるが、元住吉山Ⅰ式にいたって波状口縁深鉢に採用されると仮定した場合、それをも含む当期は、年代的に二分されることとなろう。それらの型式論的展開については先記したところであり、それぞれ佃4a期、佃4b期と仮称することができよう。しかしながら、本遺跡の層位的出土状況が示すように、この細分を積極的に推進するような出土事例は聞かない。むしろこれらを相伴出土することの方が多く、春木八幡山遺跡のほか兵庫県・片吹遺跡（泉ほか1985）等は佃4期に対照される比較的良好なまとまりをなしていることもあり、現段階での細分案は作業仮説として提示するにとどめたい。

8層出土資料を基準とする佃5期は、元住吉山Ⅰ式のほか凹線文土器が含まれている。当期の元住吉山Ⅰ式は広口深鉢等のⅡ類各器種の台頭が顕著である点は再三記してきたが、Ⅰ類波状口縁深鉢の突起の誇大化も特徴的である。その好例は一乗寺向畑町遺跡南部地区や大阪府・山ノ内遺跡B地区（吉川・豊岡ほか1988）に認められるが、前者は泉氏が元住吉山Ⅰ式を細分するにあたっての新相（泉1989の縁帯文土器様式第2様式b2期）の基準資料としたものである。その他にも新相の特徴として連弧文、刻みの多用が列挙されているが、本遺跡8層においては、前者が半円形の下限連弧文となって波状口縁深鉢の胴部文様を構成し、後者はⅡ類各器種の口縁内面からその他の部位へと派生する。すなわち、佃5期の元住吉山Ⅰ式が、泉氏の細分になる新相に比定されることを示している。したがって、佃5期における元住吉山Ⅰ式は佃4b期としたものとは層位的に明確に分離されることになる。

一方、本遺跡における層位によっては、8層の主体となる元住吉山Ⅰ式から凹線文土器を分離することができなかったが、これを分かちうるいくつかの状況証拠が存在する。香川県・永井遺跡のSR8501は後期末晩期初頭にあたる土器群のほかに、Ⅵ層とされた層中に元住吉山Ⅱ式に相当する土器をみるが（永井Ⅷ式）、他遺構には認められる前後型式が見当たらず、潜在的な一括性を保証する（渡部1990）。また、若干の混在が見られるものの、森山遺跡のSK35も元住吉山Ⅱ式の一括資料と評価しうる（岡田1997）。したがって、それらの遺跡の引き算が認められるならば、佃5期の凹線文土器も元住吉山Ⅰ式

から分離されよう。それゆえ、佃5期は元住吉山Ⅰ式の新相にあたる佃5a期と元住吉山Ⅱ式にあたる佃5b期とに細分できる。

佃5期は一般に、汎西日本凹線文ホライズンの形成期にあると評価されており、文様の広域的同調化が促進されると理解されるが、当期にいたっても地域性は堅持される。佃5a期に併行する資料である一乗寺向畑町遺跡南部地区や森山遺跡S B11には、広口深鉢口縁部が多くみられず、その主体的胴部文様であるクランク文も客体的にしか伴わない。上記遺跡で当器種が増加するのは、後続する時期を待たねばならず、森山遺跡S K35はその様相を示す好例であろう。実際、より広域に視野を広げても、佃5a期に併行する時期においては、瀬戸内地方では広島県・大宮遺跡等の例が知られるものの（伊藤1981）、東海、北陸方面ではその例をみないといったように、その西方への偏在分布が顕著に現れている。凹線文ホライズンを形成する佃5b期は、広口深鉢も比較的安定して広域に組成するようになるが、爾来、型式組列の主流にすえてきた波状口縁深鉢の解体が進行、明らかな内屈口縁を呈するものが減少し、誇大化を進めていた突起も退化縮小する。一方、それに併行する森山遺跡S K35には誇大なアヒルのくちばし状突起がみられ、山ノ内遺跡B地区にもそれに類似のものが認められる。従来、松崎・間壁両氏の指摘にあるように瀬戸内方面には突起状を呈するものが稀少であり（松崎・間壁1978）、当期にいたっても、その地域性が大阪湾を境に堅持されているのである。

以上、本遺跡と近隣遺跡との状況をあわせ、研究史と対比してきたが、泉氏による当該期近畿地方編年では注意されてこなかった地域性が析出された。そもそも、標式たる元住吉山遺跡が播磨に所在することを考慮するならば、「元住吉山式土器」の名称は、当地域で推進された編年研究の成果に冠されるべきであった。本遺跡はまさに明石海峡ひとつ隔てて元住吉山遺跡を望むところに位置しており、元住吉山式土器研究の基準足りうるものとなろう。それにいたるまでの紆余曲折は時代の提出する資料の制約によるところ大であることは否定できないが、実態の伴わない広域性概念に基づいて、資料操作が行われてきたことは反省されるべき点である。本稿は佃遺跡出土資料の検討を基礎にして、遺跡および広域性の実態と広域性の本体とを展望するものである。今後の土器研究には、斯様な視点が必要不可欠なものと私考する。

謝辞

本稿は奈良大学大学院文学研究科に提出した岡田の1997年度修士論文の一章をもとにして、執筆者両名の協議のもと、新たに書き下ろしたものである。一連の整理作業および論文作成にあたっては水野正好、泉拓良両先生にご指導いただいた。記して感謝申し上げます。また、関連資料の観察、推敲をしていく中で数多くの方々にご教示賜ったが、以下の方については特に御芳名を記して感謝の意にかえたい。

秋田かな子、大石崇史、大下明、大塚達朗、岡崎正雄、木下哲夫、木村剛朗、工藤俊樹、小泉裕司、瀬口眞司、千葉豊、富井眞、長沢宏昌、中村健二、林克彦、東和幸、三輪晃三、百瀬長秀、森川幸雄、森岡秀人、家根祥多、矢野健一

なお、本稿図版作成にあたっては、嘱託員の方々のほかに、奈良大学学生・見持浩一氏の協力を得た。最後になるが感謝の意を表したい。

（1998年3月脱稿）

脱稿後、刊行までの間にしばらく時間があり、本稿に関連するいくつかの重要な論考が発表された。本稿の内容からすると、批判検討する必要が果たされることになるが、別の機会にあらためて稿を起こ

第2節 佃遺跡出土縄文土器の編年－特に元住吉山式土器について－

し、論ずることにしたい。

(補註)

1. 「親和的關係」の概念は大塚達朗氏の研究によるところが大きい(大塚1986)。
2. なお、調整具として二枚貝と巻貝を併記したが、二枚貝とは素縁のもので、宮城県・里浜貝塚で「スレ貝殻」とされたもの(岡村1985)を想定しているが、本遺跡における積極的証拠は提示し得ない。
3. ただし、23層のLRと9層以上のそれとは、前者が直前段2本撚り充填施文なのに対し、後者が直前段3本撚り磨消手法をとる点異なっている。後者は瀬戸内方面固有の手法として広口深鉢との相関性が高い点は注意される。
4. しばしば斜刻帯に平行するようにして圧痕列が観察される(写真図版137No832)。これらの形状は一般的に「V」字状を呈しており、一方の腕が他方を切るような関係にあり、なおかつそれらの上端が一斉になで消されている点、共通している。以上の観察と若干の実験の結果から、これは素縁二枚貝のロッキング手法による施文の上に、その一部を残しつつ磨り消したものと想定される。
5. 未だ定見をみていない東海地方編年であるが、研究史的意義と層位的実態を重視し、蜆塚遺跡報告の総括において提示された「蜆塚Ⅲ式」を用いる。報告者の麻生氏も指摘するように、細分研究の必要性があることは言うまでもない(麻生1962)。
6. 蜆塚Ⅲ式を構成する有刻隆帯を巡らす波状口縁深鉢になるかと思われる破片が1片、佃遺跡からも出土しているが、それに比定できるものか否かは断定できない。
7. 大阪府・更良岡山遺跡にはⅠ3類bの口縁部形態をもち、胴部には春木八幡山遺跡同様の文様(第7図2)を配す3単位波状口縁深鉢が知られるが、この突起は棒状に発達しており、その付け根部に円孔が穿たれている(桜井1972)。
8. 砂連尾遺跡出土資料については未公表であるが、津名郡町村会の伊藤宏幸氏のご好意により実見、ここに明記するものである。

(参考引用文献)

- 秋田かな子1996「南関東西部の加曾利B式土器－構造の理解に向けて－」『後期中葉の諸様相』(第9回縄文セミナー) 縄文セミナーの会
- 麻生優1962『蜆塚貝塚 総括篇』浜松市教育委員会
- 安孫子昭二1988「加曾利B様式土器の変遷と年代(上)」『東京考古』第6号、東京考古談話会
- 阿部芳郎ほか1994『津島岡大遺跡4』(岡山大学構内遺跡発掘調査報告 第7冊)岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 池葉須藤樹1971『岡山県児島郡灘崎町彦崎貝塚調査報告』
- 泉拓良1979「西日本の縄文土器」『世界陶磁全集1 日本原始』小学館
- 泉拓良1980「北白川上層式土器の細分－京都大学教養部構内A O 24区出土の縄文土器を中心に－」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 泉拓良1981「近畿・中国・四国地方」『縄文土器大成3 後期』講談社
- 泉拓良1981「近畿地方の土器」『縄文文化の研究 第4巻 縄文土器Ⅱ』雄山閣出版
- 泉拓良ほか1985「縄文土器」市村高規編『片吹遺跡』(龍野市文化財調査報告書Ⅵ)龍野市教育委員会
- 泉拓良1989「縁帯文土器様式」『縄文土器大観4 後期晩期統縄文』小学館
- 伊藤実1981「縄文土器」桑原隆博編『大宮遺跡第4次発掘調査概報』広島県埋蔵文化財調査センター
- 大下明1992「尾鷲市周辺の遺跡と遺物」『紀伊半島の文化史的研究 考古学編』(関西大学文学部考古学研究 第6冊) 清文堂
- 大塚達朗1986「安行1式土器型式構造論基礎考」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第5号、東京大学文学部考古学研究室
- 大参義一1978「東海地方西部における縄文時代後期前半期の土器について－法仙寺遺跡・西北出遺跡の土器を中心と

- してー』『名古屋大学文学部研究論集L X X IV 史学25]
- 岡崎晋明ほか1993『吉野・紀ノ川悠久の流れ 古代・大和と紀伊の文化交流』(奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 特別展図録 第41冊) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
- 岡田憲一1997「縄文時代」小泉裕司編『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第32集, 城陽市教育委員会
- 岡村道雄1985「西畑地点出土の貝器」『里浜貝塚Ⅳ－宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究Ⅳ－』(東北歴史資料館資料集13) 東北歴史資料館
- 堅田直1965『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』(帝塚山大学考古学研究報告第1輯) 帝塚山大学考古学研究室
- 桜井敬夫1972「岡山縄文遺跡」『四條畷市史』四條畷市役所
- 佐々木謙・小林行雄1937「出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺跡－中海沿岸縄文式文化の研究1－」『考古学』第8巻第10号, 東京考古学会
- 佐原真1961「京都市一乗寺縄文文化遺跡の調査」『古代文化』第7巻第2号, 古代学協会京都事務所
- 潮見浩1960「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要』第18号, 広島大学文学部
- 千葉豊1992「西日本縄文後期土器の二三の問題－瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題－」『古代吉備』第14集, 古代吉備研究会
- 千葉豊ほか1997「京都大学本部構内A W25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1993年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 西尾市史編集委員会編1973「八王子貝塚」『西尾市史1 自然環境・原始古代』西尾市
- 西野秀和ほか1989『金沢市米泉遺跡』石川県埋蔵文化財センター
- 橋本正・酒井重洋・久々忠義1980『井口遺跡発掘調査概要』井口村教育委員会
- 増子康真1994「加曽利B式に平行する東海地方の縄文後期土器－型式編年研究の基礎的な作業として－」『古代人』第55号, 名古屋考古学会
- 松尾信裕1996「土器」平田洋司・小田木富慈美編『森の宮遺跡Ⅱ』大阪市文化財協会
- 松崎寿和・間壁忠彦1978「縄文後期文化－西日本」『新版考古学講座 第3巻 先史文化』雄山閣出版
- 松田真一1986「当麻町竹内遺跡試掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1984年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 水ノ江和同1992「西平式土器に関する諸問題－福岡県築上郡築城町所在, 松丸遺跡(D地区)出土縄文土器の位置づけ－」『九州考古学』第67号, 九州考古学会
- 南久和1993『金沢市馬替遺跡』(金沢市文化財紀要107) 金沢市教育委員会
- 宮沢公雄1986『清水端遺跡』(明野の文化財 第1集) 明野村教育委員会
- 百瀬長秀ほか1988「八窪遺跡」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2－塩尻市内その1－』((財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書2) 日本道路公団名古屋建設局・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター
- 百瀬長秀1996「長野県の様相」『後期中葉の諸様相』(第9回縄文セミナー) 縄文セミナーの会
- 柳浦俊一1994「森遺跡」『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書2』鳥根県教育委員会
- 吉川義彦・豊岡卓之ほか1988『山ノ内遺跡B地区・山直北遺跡』((財)大阪府埋蔵文化財協会報告書 第24輯) 大阪府埋蔵文化財協会
- 渡部明夫1990『永井遺跡』(四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第9冊) 香川県埋蔵文化財調査センター
- 渡辺誠編1975『桑飼下遺跡』平安博物館
- 綿貫俊一1991『川南原遺跡群発掘調査報告書』(大分県文化財調査報告書 第84輯) 大分県教育委員会